

文七元結

三遊亭圓朝

鈴木行三校訂

青空文庫

さてお短いもので、文七ぶんしちもとゆい元結の由来という、ちとお古い処のお話を申上げますが、只今と徳川家時分とは余程様子の違いしました事で、昔は遊び人というものがございましたが、只遊んで暮して居ります。よく遊んで喰つて往ゆかれたものでございます。何どうして遊んで暮しがついたものかという、天下御禁制の事を致しました。只今ではお厳やかましい事でございまして、中々隠れて致す事も出来んほどお厳やかましいかと思ひますと、麗々と看板を掛けまして、何か火入れの賽さいがぶら下つて、花牌はなふだが並んで出ています、

これを買つて店頭みせさきで公おもてむき然とがに致しておりまして、楽たのしみを妨
げる訳はないから、少しもお咎とがめはない事で、隠れて致し、金を
賭かけて大きな事をなさり、金は沢山あるが退屈で仕方がない、負
けても勝つても何うでも宜よいと、退屈しのぎにあれをして遊んで
暮そうという身分のお方には宜よろしゅうございますが、其の日暮し
の者で、自分が働あきに出なければ、喰あう事が出来ないような者が
やりますと、自然商売おろそかが疎あになります。慾徳あなくゆえ、倦あきが来
ませんから勝負を致し、今日で三日続けて商売に出ないなどとい
うことで、何うも障さわりになりますから、厳やかましゅう仰おつしやる訳で、
併しかし賭博ばくちを致あしましたり、酒を飲んで怠惰なまけもの者で仕方がないとい
うような者は、何うかすると良い職人などにあるもので、仕事を

精出して為しさえすれば、大して金が取れて立派に暮しの出来る人
 だが、惜おしい事には怠惰者だと云うは腕の好よい人にございますもの
 で、本所ほんじよの達磨横町だるまよこちやうに左官の長兵衛ちやうべえという人がございま
 して、二人前ふたりまえの仕事を致し、早くつて手際が好くつて、塵ちりぎわ際
 などもすつきりして、落雁肌らくがんはだにむらのないように塗る左官は少
 ないもので、戸前口とまえぐちをこの人が塗れば、必ず火の這入はいるような
 事はないというので、何どんな職人が蔵くらを拵こしらえましても、戸前口だ
 けは長兵衛さんに頼むというほど腕は良いが、誠ままけに怠惰なまけものでご
 ざいます。昔は、賭博に負けると裸はだか体かで歩いたもので、只今はお
 蔵やかましいから裸はだか体かどころか股引も脱とる事が出来ませんけれども、其
 の頃は素裸すっぱだか体かで、赤合羽あかがつばなどを着て、「昨夜ゆうべはからどうもす

つぱり剥むかれた」と自慢しに為しているとは馬鹿ばか氣た事ことでございます。

今長兵衛は着物まで取られてしまい、仕方なく十一になる女の子の半纏はんてんを借りて着たが、余程短く、下帯の結び目が出ています

が、平氣な顔をして日暮にぼんやり我家わがやへ歸つて参り、

長「おう今歸けえつたよ、お兼かね……おい何どうしたんだ、真暗まっくらに為して置いて、燈火あかりでも点つけねえか……おい何ど処どこへ往いつてるんだ、燈火を点つけやアな、おい何ど処どこ……其そこ処どこにいるじゃアねえか」

兼「あゝ此こゝ処どこにいるよ」

長「真暗だから見えねえや、鼻つまア撮つまれるのも知れねえ暗くれえ処ところにぶつ坐つツわてねえで、燈火でも点つけねえ、縁起わりが悪いや、お燈明とうめいでも上げろ」

兼「お燈明どこじやアないよ、私は今帰ったばかりだよ、深川の一の鳥居まで往つて来たんだよ、何処まで往つたつて知れやアしないんだよ、今朝宅のお久が出たつきり帰らねえんだよ」

長「エ、お久が、何処え往つたんだ」

兼「何処へ往つたか解らないから方々探して歩いたが、見えねえんだよ、朝御飯を喰べて出たが、それつきり居なくなつてしまつて、本当に心配だから方々探したが、いまだに帰らねえから私はぼんやりして草臥れけえつて此処にいるんだアね」

長「ナ：ナニ知れねえ、年頃の娘だ、え、おう、いくら温順しいたつてからに悪い奴にでもくつついて、え、おう、智慧え附けられて好い気になつて、其の男に誘われてパイと遠くへ往くめえ

もんでも無え、手前はてめえその為に留守居をしているんじやアねえか、
氣を附けてくれなくつちやア困るじやアねえか」

二

かね「留守居をして居るつたつて、斯こんな貧乏世帯を張つてる
から、使いに出す度たび一緒に附いては往かれませんよ、だが浮氣を
して情夫おとこを連れて逃げるような娘こじやアありません、親に愛あい想そう
が尽きて仕舞つたに違いないんだよ、十人並の器量を持つて、
世間では温順おとなしい親孝行者だといわれてるのに、お前が三年越し
道楽ばかりし為て借金だらけにしてしまい、家うちを仕舞うの夫婦別れ

をするのという事を聞けば、あの娘だつて心配して、あゝ馬鹿／＼しい、何時までも親のそばに喰附いてれば生涯うだつはあがらないから、何処へか奉公でもするか、何んな亭主でも持つ方が、檻樓を着てこんな真似をしてこんな親に附いて居ようより、一層の事好い処へ往つて仕舞おうとお前に愛想が尽きて出たのに違くない、あの娘が居ればこそ永い間貧乏世帯を張つて苦勞をしながらこう遣つていたが、お久が居ないくらいなら私は直に出て往つちまうよ」

長「お久が居なけりやア此方も出て往つちまわアな、だからよ
う、己が悪いから連れて来て呉んな、父が悪いツて是から辛抱するから、え、おい、お願いだ、己だつてポカリと好い目が出れば、

又取返して、子供に着物の一枚も着せてえと思つて、ツイ追目に掛つたんだが、向後もうふツつり賭博はしねえで、仕事を精出すから、何処へか往つてお久をめつけて来てくんナ」

かね「めつけて来いたつていないよ」

長「いねえくと云つたつて何処か居る処え往つてめつけて来やアな」

かね「居る処が知れてるくらいなら斯様な心配はしやアしない、お戯けでないよ、私もお前のような人の傍には居られないよ」

長「居られねえたつて……え、おい、お久を何うかして……」

かね「何う探しても居ないんだ」

長「居ねえつて……え、おい」

かね「お前の形なりは何なんだね、子供の着物なんぞを着てさ、見つともないじゃアないか」

長「見つともねえつたつて、竹とこン処とこのみい坊はんてんの半纏はんてんを借りて来たんだ」

かね「お尻おもてがまるで出て居るよ、子供の半纏はんてんなぞを着て、好いい気きになつて戸外おもてをノソノソく歩いてゝさ」

とグズグズく云つて居ると、表の戸をトントンく叩たたき、

男「御免ごめんください」

かね「はい只今開けます……誰か来たよ、お前隠れ場かくれがが……仕様仕様がないねえ」

男「どうか開けておくんない、御免ごめんなさいまし……ええ、誠に

暫く、何時もお達者で」

長「へえ：誰だっけ忘れちまつた、何方でしたかえ」

男「エ、私は角海老の藤助でございます」

と云われて長兵衛は手を打ち、

長「おう、違えねえ、こりやアどうも、すっかり忘れちまつた、

カラどうも大御無沙汰になつちまつて体裁が悪いんでね、こんな
処え来てしまつたんで、誠にどうもツイ：」

藤「お内儀さんが、一寸長兵衛さんに御相談申したい事があ
るから、直に一緒に来るようにという事で」

長「お前さんの処は余り御無沙汰になつて敷居が鴨居で往かれ
ねえから、何れ春永に往きます、暮の内は少々へまになつて、

往かれねえから何れ……」

藤「兎や角こう仰しやるだろうが、直にお連れ申して来いと、お内儀さんが仰しやるので」

長「直につたつて大騒ぎなんで、家内うちに少し取込とりこみがあるんで、年頃の一人娘のあまつちよが今朝出たつきり帰けえらねえので、内の女房やつも心配しんぺえしてえるんでね」

藤「お宅うちの姉ねえさんのお久さんは宅へ来ておいでなさいますよ、其の事に就ついてお内儀さんが貴方あなたに御相談があるので」

長「エ、：お久がお前めん処ところに往つてるとえ」

かね「あらまア本当に有難う存じます、何処どこへ参りましたかと存じて心配して居ましたが、御親切に有難う存じます：お前さん

直すぐに往むかつて連れて来ておくれよ」

長「じゃアまあなんだ……直あとに後あとから往むかきますからお内儀さんへ宜よろしく」

藤「直ちかに御同道ごどうしろと申しましたから」

長「直ちかにつたつて何なんですから、直じきに後あとから参まゐります、左様さやうなら宜よろしく」

かね「何なにんだよお前まへ、御親切ごせつせつに知らせて下くだすつたのに何故なぜ直すぐに往むかかないんだよ」

長「なぜつたつて此この形なりじゃア往むかかれねえ……手前てめえのを貸かしねえ」

かね「いやだよ私の着物きものがありやアしないよ」

長「手前は宅うちに居るんだからこの半纏はんぢんを着て居やアな」

かね「そんなものを着ては居られません、お尻しつぽがまるで出てしまうよ」

長「湯ふんどし巻まきを締めてりやア知れないよ」

かね「人が来ても挨拶が出来ないよ」

長「面と向つて話をして、後あとへ退さがる時に立てなければ後びつしやりをすればいゝ」

かね「おふざけでないよ」

長「そんな事を云わねえで貸ひっぱしな」

と無理やりに女房の着物を引剥ひっぱいでこれを着て出掛けました。

三

左官の長兵衛は、吉原土手から大門おおもんを這入りまして、京町一丁目の角海老楼かどえびろうの前まで来たが、馴染の家うちでも少し極りが悪く、敷居が高いから怯おびえながら這入って参り、窮屈そうに固まって隅の方へ坐つてお辞義をして、

長「お内儀かみさん、誠に大御無沙汰をして極りがわるくつて、何なんだか何どうもね……先刻さつき藤助とうすけどんにも然そう申しやしたんですが、余あんまり御無沙汰になったんで、お見違みそれ申すくれえでござえやすが、何時いつも御繁昌いっぺんのことは蔭ながら聞いておりやす、誠に何んとも何うもお忙がしい中をわざくお知らせ下すつて誠に有難うござえ

やす……お久ア此^{こゝ}処に打^ぶツ坐^つつて、宅^{うち}の者^{もん}に心^{しん}配^ぺを掛^かけて本
 当^{まこと}に困^{こま}るじやアねえか、阿^お母^{つか}アはお前^{めえ}を探^{たず}しに一の鳥^{とり}居^いまで往^ゆつ
 たぜ、親^{おや}の心配^{しんぱい}は一^{いっ}通^{つう}りじやアねえ、年^{とし}頃^{ぐら}の娘^{むすめ}がびよこ〜出^で歩^ぶ
 いちやアいけねえぜ、何^{なに}んで此^こ方^ち様^{さま}へ来^きてえ^えるんだ、こ^こうい^いう
 御^ご商^{しょう}売^{ばい}柄^{がら}の中^{なか}へ」

内^{うち}儀^ぎ「それ処^{どこ}じやアないよ、こ^こうしてお前^{めえ}の事^{こと}を心^{しん}配^ぺして来^きた
 のだ、這^こ入^いりにくが^がつて門^{かど}口^{ぐち}をうろ〜して^{して}いたが、切^き羽^う詰^めりに
 な^なつて這^こ入^いつて来^きたんだが、私^{わたし}も忘^{わす}れち^ちま^まつたあね、お前^{めえ}が仕^し事^{ごと}
 に来^きる時^{とき}分^{ぶん}、蝶^ち々^{よう}鬚^{すげ}に結^{むす}つてお弁^{べん}当^{だう}を持^もつて来^きたつきり、久^{ひさ}しく
 会^あわ^わないから、私^{わたし}も忘^{わす}れてしま^まつたが、此^こ処^{こゝ}へ来^きて、此^この娘^{むすめ}がお
 い〜泣^ないて口^{くち}が利^きけ^けないんだよ、それからまアど^どうしたんだ、

何か心配事でも出来たのかというと、此の娘が親の恥を申しまして済みませんけれども、親父がまだ道楽が止みませんで、宅へも帰らず、賭博ばかり烈しく致して居りますが、あすが日、親父の腰へ縄でも附きますような事がありますと、私も見てはいられませんが、漸々借財が出来まして、何うしても此の暮が行立たず、夫婦別れを為ようか、世帯をしまおうかというのを、傍で聞いて居りますと、私も子供じゃありませんから、聞き捨にもなりませんので、誠に申し兼ねましたが、お役には立ちますまいけれど、私の身体を此方さまへ、何年でも御奉公致しますから、親父をお呼びなすって私の身の代を遣つて、借財の方が付いて、両親交情よく暮しの附きますように為てやりとうございます、私がこうい

う処へつとめをしていますれば、よもや親父も私への義理で、道
楽も止もうかと存じます、左様なれば親父への意見にもなります
から、どうぞ私の身体をお買いなすつて下さいと、手を突いて私
へ頼むから、私も悔りしたんだよ、本当に感心な事だつて、当家
にも斯うやつて沢山抱の娘もあるが、年頃になつて売られて来る
ものは大概淫奔いたずらか何か悪い事を仕て来るものが多いんだのに、
親の為に自分から駄込んで来て身を売るといふような者が又とあ
る訳のものじゃアないよ、本当にこんな親孝行者に苦勞をさせて
好い氣になつてちやア濟まないよ、お前幾歳いくつにおなりだ、四十の
坂を越して、何うしたんだねまア、此の娘こに不孝だよ」

長「えゝ……誠まことにどうも面目次第しでえもござえやせん、そんな事と

知らねえもんですからね、年頃にもなつてやすから、ひよツと又
悪い者が附いて意地でも附けて遠くへ往つちまつたかと思つて、
嬢かアも驚きやして、方々探して歩いた訳なんで、へえ、お久堪忍
してくれ、誠に面目次第もねえ、汝てめえにまでおれは苦勞をさせて」
と云いさして涙を浮うかめ、声を曇らし、

長「実は己おらアお内儀めえさんの前だが、汝てめえに手を突いて謝るくれえ
親の方が悪わりいんだが、汝の知つてる通り、此の暮は何うしても行
立たねえ訳になつちまつただけけれども、たつた一人の娘じょうを女
郎ろに売ろりたくもねえし、世間てえへ対しても済まねえ訳だ、又本意
でもねえから、然そんな事を為したくもねえが、何うでも斯こうでも此
の暮が行立たねえから、お久、親が手を突いて頼むが、何うかま

ア他家さまなら願ねげえ難にくいが、此方こちらさまだから悪くもして下さるめえから、此方こちらさまへ奉公して、二年か三年辛抱してくれ、ば、汝の身の代だけは一旦借金の方かたせえ付けてしまえば、己がまたどんなにでも働はたれえて、汝の処は何なんとかするが、然そうしてくれ、ば己への良い意見だから、向きようこう後ふつつりもう賭博ばくちのぼの字も断つて、元々通り仕事を稼いで、直じきに汝の身受を為しに来るから、それまで汝奉公してえてくれ」

四

久「私は、固もとより覚悟をして来た事だから、何時いつまでも奉公し

ますけれど、お前また私の身の代を持つてつてしまつて、いつものように賭博ばくちに引掛ひっかつてお金を失してしまつと、お母つかあがまたあゝいう気象だからお前に逆らつて、何なんだ彼かんだというとお前が又癩癩を起して喧嘩を始めて、手暴てあらい事でもして、お母の血の道を起すか癩でも起つたりすると、私がいればお医者を呼びに往つたり、お薬を飲ましたりして看病する事も出来ませんが、私がないと、お母を介抱する人がないのだから、後生お願いだが、私は幾年でも辛抱するからお前お母と交情なかよ好く何卒どうぞ辛抱して稼いでおくんなさいよ、よ」

長「あいよ……あいよ……誠に何どうもカラどうも面目次第しでえもござえやせんで、何なんともはや、何なうも、はア後悔こうけえしやした」

内儀「御覽よ、こういう心だもの、実に私も此の娘には感心してしまつたが、お前幾干いくらお金があつたら此の暮ゆきが行立たつんだよ」

長「へえ私共わっちの身の上でござえやすから百いっぽん両もあればすつかり綺麗さつぱりになるんで」

内儀「百両ひやくりょうで宜いいのかえ」

長「へえ：」

内儀「それではお前に百両のお金を上げるが、それというものも此の娘の親孝行に免じて上げるのだよ、お前持って往つて又うっかり使つてしまつては往けないよ、今度のお金ばかりは一生懸命にお前が持つて往くんだよ、よ、いゝかえ、此の娘の事だから私も店へは出し度たくもない、というは又悪い病でも受けて、床にで

も着かれると可哀そうだから、斯う云う真実の娘ゆえ、私の塩あんば梅いの悪い時に手許てもとへ置いて、看病がさせ度いが、私の手許へ置くと思ふと、お前に油断が出るといけないから、精出して稼いで、この娘を請出しうけだに来るが宜いよ」

長「へえ私わっちも一生懸命になつて稼ぎやすが、何うぞ一年か二年と思つて下せえまし」

内儀「それでは二年経つて身請に来ないと、お気の毒だが店へ出すよ、店へ出して悪い病でも出ると、お前ぼちこの娘の罰は当らないでも神様の罰が当るよ」

長「えゝそれは当ります、へえ有難うござえやす、貧乏世帯しよてえを張つてるもんですから、母親おふくろと一緒に苦労して借金取のつけ

え自分で言訳に往つて詫ごとをしてくれるんです……へえ、其の代りお役には立ちやすめえから、一々小言を仰しやつて下せえやし、お久、お内儀さんも斯う仰しやつて下さるから何だが、店へ出てお客の機嫌きげんの取れる人間じゃアねえが、其の中にやア様子も解るだろうから……己は早く家へ歸つてお母にも悦ばせ、借金方を付けて、質を受けて、汝の着物も持つて来るから」

内儀「そんな事は宜いよ、江戸行の時に取りに遣るから……お前財布があるまい、お金も丁度他家わきから来たのがあるから財布ぐるみ百両貸して上げるよ、さア持つておいで」

長「へえ、誠に何うも、有難うござえやす、じゃアお内儀さんすぐ直にお暇いとましやす」

内儀「早く家へ往つてお内儀さんに安心させてお上げよ」

長「じやアお久、宜いか」

久「お母さんによくいつておくれよ」

長「あい、あい」

と戸外へ出たが、掌の内の玉を取られたような心持で腕組を為

ながら、氣抜の為たように仲の町をぶら／＼参り、大門を出て土

手へ掛り、山の宿から花川戸へ参り、今吾妻橋を渡りに掛る

と、空は一面に曇つて雪模様、風は少し北風が強く、ドブン／＼

と橋間へ打ち附ける浪の音、真暗でございます。今長兵衛が橋

の中央まで来ると、上手に向つて欄干へ手を掛け、片足踏み掛け

ているは年頃二十二三の若い男で、腰に大きな矢立を差した、お

たなものふうてい
 店者風体な男が飛び込もうとしていますから、慌て、後から
 抱き止め、

長「おい、おい」

男「へへへえ」

長「気味の悪い、何んだ」

男「へえ：真平御免なさいまし」

長「何んだお前は、足を欄干へ踏掛けて何うするんだ」

男「へえ」

長「身投げじゃアねえか、え、おう」

男「なに宜しゆうございます」

長「なに宜い事があるもんか、何んだ若え身空アして……お店

風だが、軽はずみな事をして親に歎なげきを掛けちやアいけねえよ、ポカリときめちまつてガブ／＼騒さわいだつてお前めえ助かりやアしねえぜ、え、おい、何なんで身を投げるんだえ」

五

男「御親切に有難うございます、私も身を投げる気はございませんが、とて逆も行立ちません、もう思案も分別も仕尽しましたあかつきに覚悟を極きわめたので、中々容易な事ではございせんから、お構まいなく往いらしつて下さいまし」

長「お構まいなくつたつて、お構まいなく往いかれるかえ、人情とし

てお前の飛び込むのを見て、ア、然うかといつて往かれねえじゃアねえか何んで死ぬんだよ、店者だから大方女郎のつかい込みで、金が足らなくって主人に済まねえって……極つてらア、然うだろう」

男「いえなに然んな訳じゃアないが、なに宜しゆうございます」
長「宜しくねえよ、冗談じゃアねえぜ、え、おう」

男「御親切は有難う存じます、私は白銀町三丁目の近卯と申します鼈甲問屋の若い者ですが、小梅の水戸様へ参つてお払いを百金戴き、首へ掛けて枕橋まで参りますと、ポカリと胡散な奴が突き当りましたから、はつと思つてると、私の懐へ手を入れて逃げて行きましたから、何を為やアがると云つて、後で

見ますと金が有りませんから、小僧の使ではなし、金を泥坊に奪れたといつて帰られもせず、と云つて何処へ往つて相談致すといふ処もございせんから、身を投げるんで、大金の事でございませから何んな処へ参りまして相談を致しても無駄でございませら身を投げるのでございませ、何うぞお構いなく往らして」

長「百両奪られちまつたのかえ、何うも為ようがねえなア、冗談じやアねえぜ、大店なんてえもなアおおまかだなア、己ツちの身の上では百両の金で借金を残らず払つて、好い正月が出来るんだが、本当に、大金を奪られるような者に払いを取りに遣るとはおおまかなもんだなア、お前もまた間拔じやアねえか、胴巻へ入れて確り懐へ入れて置けば宜いのに、百両といえは重え金額だ、

本当に冗談じゃアねえぜ、だかの……金で生命いのちは買えねえや、え、おう、何処どっかへ相談しに往きねえな、旦那に逢つて然そう云いねえ、泥坊に奪られて誠に面目次第しでえもござえやせん、全く奪られたに違ちげえ有りやせんて、え、おう何処どっかへ往つて相談して見ねえな」

男「へえ、相談したくも親も兄弟も無い身の上で、主人も手前ばかりは身寄頼りのない身の上だから、辛抱次第で行ゆく々は暖簾のれんを分けて遣る、其の代り辛抱をしろ、苟かりそめにも曲つた心を出すなど熟つく々御意見下すつて、余り私を鼻屎ひいきになすつて下さいますもんだから、番頭さんが嫉そねんで忌いやな事を致しますから、相談も出来ませんが、何うしても私わたくしが女郎じようろ買でも為して使い込んだとしきやア思われませんか、面目なくつて旦那さまに合あわす顔はございま

せん、なに宜しゆうございますからお構いなく往らしつて」

長「いけねえなア、何うしてもお前死めえしななくツちやアいけねえのか……：じやア仕方がねえ、金ずくで人の命は買えねえ、己も無くツちやアならねえ金だが、お前でつくわに出で会わしたのが此方こつちの災難せえなんだから、これをお前に……：だが、何うか死なねえようにしてくんなナ、え、おう」

男「ヘエ、死なないように致しますから、お構いなく往らしつて下さいまし」

長「お構かめえなくツたつて……：じやア往くから屹度きつと死なねえとはつきり極りをつけてくんなよ」

男「宜しゆうございます、死にません、く、へえ」

長「冗談じゃアねえぜ、往くよ宜いか」

と云いながらバタ／＼／＼と二十歩ばかり駈けて来たが、何うも氣に成るから振り返かえて見ると、其の若い者がバタ／＼／＼と下しももて手の欄干の側へ参り、又片足を踏掛ふんがけて飛び込もうとする様子ゆえ、驚いて引返ひっかえして抱き留め、

長「まア待ちなよ、待ちなてえに……それじゃア何うしても金が無けりやア生きて居られねえのか、仕様がねえなア、さア己がこれを……だが何どうか死なねえような工夫はねえかなア……じゃアまア仕方がねえ……困るなア」

男「お構いなく往らッして、御親切は解りましたから」

長「じゃア往くよ」

とバラ／＼と往きに掛つたが、又飛び込もうとするから、

長「仕様がねえなア此の人は、冗談じゃアねえぜ、金が無くツ
ちやア何うしてもいけねえのか」

男「へえ、有難う存じます」

ときめ／＼と泣き沈み、涙声で、

男「私^{わたくし}だツて死^{たく}に度はございませんけれども、よんどころない
訳でございますから、何うぞお構いなく往らして、もう宜しゆ
うございます」

長「お構いなくつたつて往けねえやな、仕方がねえ、じゃア己
が此の金を遣ろう」

六

長「実は此処こゝに百両持つてるが、これはお前めえのを奪とつたんじやアねえぜ、己こは斯かんな嬢あの着物あを着て歩くく位の貧乏え世帯じよてえの者が百両なんてえ大金てえきんを持つてる氣遣きづけえはねえけれど、己こに親孝行な娘もんが一人有つての、今年十七になるお久もんてえ者もんだが、今日吉原の角海老かっこへ駆込かっこんでつて、親父かが行立ちませんから何うか私の身体を買つておくんなさい、親父への意見いにもなりましようからつて、娘あが身を売つて呉れた金あが此処こゝに在あるんだが、其あの身の代あをそつくりお前に遣あるんだ、己こん処とこの娘あは、泥水あへ沈あんだツて死ぬんじやアねえが、お前は此処こゝから飛び込んで本当に死ぬんだから、

此れを遣つちまうんだ、其の代り己は仕事を為て、段々借金を返して往つた処が、三年かゝるか、五年掛るか知れねえが、悉皆り借金を返し切つて又三年でも五年でも稼がなけりやア、百両の金を持って、娘の身請を為に往く事が出来ねえ、あゝ何んでも斯んでも娘を女郎にするのだ、仕方がねえ、其の代り己の娘が悪い病を引受けませんよう、朝晩凶事なく達者で年期の明くまで勤めますようにと、お前心に掛けて、ふだん信心する不動様でも、お祖師様でも、何様へでも一生懸命に信心して遣つておくれ」

男「何う致しまして左様な金子は要りません」

長「己だつてさ遣りたくも無えけれどお前が死ぬというから遣るてえのに、人の親切を無にするのけえ」

と云いながら放り付けて往きました。

男「やい何を為しやアがるんだ、斯こんなものを打ぶつけやアがつて、畜生め、財布の中へ礫いしころか何か入れて置いて、人の頭へ叩き付けて、ざまア見やアがれ、彼あ様な汚なりない形なりを為していながら、百両なんてえ金を持つてる氣遣きつけえはねえ、彼あ様な奴どろぼうが盗どろぼう賊どろぼうだか何なんだか知れやアしない、此こ様な大こきな石を入れて置きやアがつて」

と撫なで見ると訝おかしな手障てざわりだから財布の中へ手を入れて引出しと見ると、封ふうきん金で百両有りましたから恟びつくりして橋たもとの袂たもとまで追おつかけて参り、

男「もしお前さん、今のお方もし……ア、もう見えなくなつちまった……有難う存じます、此の御恩は死んでも忘れやア致しま

せん、左様なお方とも存じませんで悪口あっこうを吐きまして済みませ
ん、誠に有難う存じます、必ず一度は此の御恩をお返し申します、
有難う存じます」

と生返つたような心持になりましたから、取急いで白銀町三丁
目の店へ歸つて参りましたが、御主人は使いの歸りが遅いから心
配でございます。

主人「平助へいすけどん、未だ歸りませんか文七は」

平「へえ、まだ歸りません、使いに出すと永いのが彼の癖あれで、
お払い金などを取りにお遣りなさるのは宜しくない事で、誠に困
りましたな」

主「歸つたら能く小言をいいますよう」

と心配して居る処へ表の戸をトンくく、

文「番頭さんトンくく……番頭さん文七でございます、只今帰りました」

平「旦那、文七が帰りました」

主「よく然ういつてくんな」

平「今開けるよ……何う云うもんだなア、余り遅いじやアない

かけまわ

か掛廻りに往った時などは早く帰つて来てくれないと、旦那の

お小言が私わしの方へ来るから本当に迷惑だ、冗談じゃアないぜ」

文「誠に遅くなりました、つい高橋様のお相手を為して居りました、御機嫌を取りく種いろく々お話しになりましたので、大きに遅くなりまして誠に相済みません」

平「旦那文七が帰りました」

主「さア、此方こつちへ遣よこしておくれ、実に困ります」

文「旦那只今、高橋様で種々世の中のお話が有りまして、又碁のお相手を致したものですから大きに遅くなりました、え、それから高橋様あきらが此方こつちから持つて参りました革の財布を御覧なさいまして、商人あきんどは妙な財布を持つ、少し借り度たい、其の代り此方の縞の財布を貸して遣ると仰しやつて、是を拝借致しまして、金子たしかは慥たしかに百両受取つて参りましたから、お改めなすつてお受け取り下さいますように」

主「なに金を……何を云うんだな、変な人だな、実に、文七は使つかいに出せないね、本当に」

七

主人「お得意先へ掛け廻りに往つて、其処そこでお相手をするつたつて碁を打つという事はありませんよ、お前は碁にかゝるとカラ夢中だから困る、お前が帰つて仕舞つた後あとを見ると碁盤の下に財布の中へ百両入つたなり有つたから、高橋様さんがお驚きなすつて、さぞ案じて居るだろうから早く知らせて遣れと仰しやつて、彼方あちらの御家来が二人で提灯ちようちんを点けて先刻さつき金子は届けて下すつたのに、虚言うそを吐ついて……革財布は彼方で入用いりようとはなんだ、ちやんと此処こゝに百金届ついていますよ……其の百両の金は何処どこから持つて

来たんだ」

文「へエ……それは大変」

主「なに」

文「それは何^どうも、大変な事で」

主「何^なんだ」

文「へエ……それじゃア私^とや奪^とられなかつたんだ」

主「何んだ、お前はどうも訳の解らん事を云うからしようがない、平助どん、此の金の出^{でどころ}所を調べておくれ、イエサ、未だ二

十二や三になるものに、百両という大金を自由にされるような事は有るまい、お前へ店を預けて置くのに、またこれがどう云う融通^{でどこ}をして、何処^{どこ}に金を預けて置くか知れねえから此の百両の出所^{でどこ}

を調べてくんない

平「へエ……おい、お前わし私が迷惑するよ、冗談じゃアない、困るよ、疾とうに金は届とこいてる処へ又百両持つて来るてえのは訝おかしいじゃアないか」

文「へエく、誠に粗忽そこつ千万な事を致しました、何なんとも何どうも申訳はございませんが、実は慥たしかに懐へ入れてお邸やしきを出た了簡でございまして、枕橋まで参ると怪しい奴わたくしが私に突き当りながら、グツと手を私の懐の中へ入れました時に奪とられたに違ちがいなと思おもい、小僧の使じゃアなし、旦那様に申訳がない、百両の金子を奪られては済まんと存じまして、吾妻橋から身を投げようと致す所へ通り掛かつたお職人体ていの方が私わたしを抱き止めて、何ういう訳で死ぬ

かと尋ねましたから、これくと申すと、それは氣の毒だ、此処に百両有る、これを汝に遣るから泥坊に奪られない積りで主人の処へ往くが宜い、併しそれは尋常の金じやない、たつた一人の娘が身を売つた身の代金だけでも、これを汝に遣るからと仰しやつて、御親切なお方に戴いて参りましたのでございます」

主「イヤハヤ何うも呆れちまつた、何うだろう、其のお方が通らんければドリと飛び込んで仕舞い、土左衛門になつちまつたんだ、ア、危い処だ、ム、其のお方はお前の命の親だ、御真実なお人だの、何うも百金と云う金を直ぐに恵んで下さるとは有難いお方だ、その何は何処のお方で何んと云うお方様だ」

文「ヘエ……何んてえお方だか存じません」

主「馬鹿だねお前何うもコレ百両という大金を戴きながら、其のお方のお名前も宿しゆくしよ所しよも聞かんでえ事はありませんよ」

文「お名前も所もお聞き申す間もないので、アレ〜と云つてる中うちに、ポンと金を打ぶツ附けて逃げて往ゆきました」

主「金を人に投げ附けて逃げて行く奴があるものか、お名前が知れんじやアお礼の為しようもなし、本当に困るじやアねえか」

文「へエ、誠に何うも済みませんで」

主「ムー……娘を売った金とかいったな」

文「へエ、その今年十七になるお久さんという娘の身を角海老じょうろへ売った金が百両あるから、これをお前に遣るが、娘は女郎じょうろにならなけりやアならない、悪い病を受けて死ぬかも知れないから、

明暮あけくれ凶事のないように、平常ふだん信心する不動様へでも何なんでも、お線香を上げてくれと、男泣きに泣きながら頼みましたが、旦那さまえ、何うか店の傍わきへ不動様を一つお拵こしらえなすツて」

主「何んだ馬鹿ア云つて……コーと角海老というのは女郎屋さんだ、其処そこへ往つてお久さんという十七になる娘が身を売つたかと聞けば、それから知れるが、私わしは頓とんと吉原へ往つた事がないのだ、斯こういう時には誠に困る、店のものも余り堅あんまいのは斯こういう時に困るな、吉原へは皆みんなな往つた事がないからう、平助どんなぞも堅いから吉原は知るまい」

平「エ、角海老てえ女郎屋じょうろやは京町の角店かどみせで立派なもんです
主「お前吉原へ往つたのかえ」

平「此間三人で：イエ何にソノ」

主「ごまかして時々出掛けるね、併し今夜は小言を云いません、夜更の事だから、向後たしなみませんといけませんよ」

と別に小言もなく引けました。

八

翌朝主人は番頭を呼んで何かコソ／＼話を致しましたが、やがて番頭の平助は何れへか飛んで往き、暫く経つて帰つて来まして、またコソ／＼話をしましたが、解つたと見えまして、

主人「羽織を出してくんナ……文七や供だよ」

文「へエ」

と文七が包つゝみを持って旦那あとの後へ随ついて観音様へ参詣を致し、彼れから吾妻橋へ掛りました時に文七は「あゝ昨夜ゆうべ此処こゝン処とこで飛び込もうとしたかと思うと悚然ぞっとするね」と云いながら橋を渡つて参りました。

主人「本所達磨横町というのは何処どこだえ、慥こか此所こゝらかと思うが、あの酒屋さんで聞いて見な左官の長兵衛さんというお方がございますかッて」

文「へエ……少々物を承ります、エ、御近所に左官の長兵衛さんて方がございますか」

番頭「それはね、彼処あそこの魚屋の裏へ這入ると、一番奥うちの家で、

前に掃溜はきだめと便所ちようずばが並んでますから直じきに知れますよ」

主人「大きに有難う存じます、それから五升の切手を頂戴致します、柄樽えたるを拝借致します、樽こちらは此方で持つて参りますから」

と代を払つて魚屋の路地へ這入つて参ります。此方は長兵衛の家うちは昨夜ゆうべからの騒さわぎでございます。

兼「何どうするんだよ、何ど処へお金を遣つたんだよ」

長「何ど処へつて遣つちまつたよ」

兼「お金を預けた処とこをお云いな」

長「預けたんじやアねえよ、遣つちまつたんだてえに、解らねえ、昨夜ゆうべから終よっぴて夜責めてやアがつて些ちつとも寝られやアしねえ、己おれだつて遣りたくはねえが、人が死ぬつてえんだ、人の命いのちに換けえ

られるけえ」

兼「ふん、人を助けるなんてえのは立派な大家の旦那様の事だよ、娘が身を売ってお前の為に百両拵えてくれたものを、ムザ／＼他人に遣つちまうてえ奴があるかえ本当に、何処かへ金を預けて置いて、又賭博の資本にしようと思つて、本当に其の金はどうしたんだよ、何処へ遣つたんだよう」

長「己だつて遣り度くはねえ、余り見兼たから助けたんだ」

兼「ふん、見兼て助ける風かえ、足を掬つて放り込むだろう」

長「誰が放り込む奴があるものか」

とグズ／＼いつている処へ、

主人「ハイ御免下さいまし」

長「おゝ、無闇に開けちやアいけねえよ……見つともねえ、そんな形なりをして、人が来たんだよ、己が挨拶あいさつをするまで其処そこに隠れていねえ」

兼「見つともないたツて誰が斯こんな形に仕たんだよ」

長「えゝ大きな声をするな、見つともねえから二枚折にめえおりの屏びよう風ぶの後うしろへ引込んでな、え、もう開けても宜ようがす」

主人「御免下さいまし、長兵衛さんと仰しやる棟梁たぐさんのお宅たくは此方こちらで」

長「えゝ何なに棟梁でも何んでもねえんで、へゝ、縮屋ちぢみやさんかえ」

主人「イ私わたくしは白銀町三丁目近江屋おうみやうへえ卯兵衛と申しまして鼈甲渡

世を致すもので、此者をお見覚えがございますか……何うかよく此の奉公人の顔を御覧なすつて……文七此方へ出て此のお方の顔を見な」

文「へエ、此のお方……ア、此のお方でございます、昨晩は誠に有難う存じます……旦那様此のお方が私を助けて下さつたに違いないので」

長「お、此の人だ、お前だ、何うもまあ宜かつた、お前に金を遣つたに違えねえね……賭博の資本に他へ預けたんじやアねえ、チヤンと証拠があるんだが、まあ宜かつたノ」

文「へエ、何うも、是は何うも、昨夜は暗くつて碌にお顔も見えませんでした、お蔭様で助かりまして有難う存じます」

主人「其の折はまた此者が不調法な詰らん事を申し貴方に御苦労を掛けまして、何とも何うもお礼の申上げようがございません、まったくは此者が泥坊に奪られたものではございません、お屋敷へ忘れて参りましたので、此の者が宅へ帰らんうちに金子はお屋敷から届けて参りましたから、何うしたのかと案じて居りまする処へ此者が帰つて参りまして、金子を出しましたから、不思議に思いました、段々調べて見ますると、まったくは賊に奪られたと心得て、吾妻橋から身を投げようとする処へ、これくのお方が通つてお助けなすつたという事ゆえ、取敢ずお礼に出しましたが、何んとも何うも恐入りました、有難う存じます」

九

主人「わたくしども私共も随分大火災でもございますと、五十両百両とほどこし施を出した事もありますが一軒前一分か二朱にしきやア当りませんで、それはみょうもん名聞、貴方は見ず知らずの者へ、おいそれと百両の金子を下すつて、お助けなさるといふ其のお志というもの、実に尊い神様のようなお方だつて、昨夜さくやもね番頭と貴方のお噂を致しましたなれども、お名前が知れず、誠に心配致しておりますが、ようやくの事で解りましたから、御返金に参りましたが、慥たしか此れは角海老さんとかで御拝借の財布だそうで、封金のまゝ持つて参りましたから、そっくりお手許てもとへお返し申します。」

長「えゝ」

と手に取上げて考え、

長「金子が出たんですか」

主「へエ、金子は奪られは致しません、此者これより先さきに宅うちへ届いて居りましたから二重でございます」

長「ムゝ：じやア此の人は奪られねえのかえ、冗談じやアねえぜ、え、おう、己おらアお前めえのお蔭よつで夜よつびて嬬かゝあに責められた……旦那間まちげえ違ちがだつて程があらア」

主人「此者も全く奪られたと思つたので、誠に何どうも何なんともお礼の申し上げようはございませんが、金子は其の儘お受取りを願ねがいます」

長「だがね、これを私が貰わうのは極わりが悪いや一旦此の人に遣わつちまつたんだから取返すのは極わりが悪いから、此の人に遣わつちまおう、私は貧乏人で金が性しに合あわねえんだ、授あからねえんだろ
うから、此の人が店でも出す時の足たにして下ささえ、一旦此の人に授あかつた金だから、何なうか遣わつておくんねえ」

主人「イエ／＼どう致いたしまして、奪うられたら戴おきます、御ご氣象は解わりましたから、併あし全く二重に金を私が戴おく訳で」

長「だがね、何なうも……だからよ、貰わつて置くから宜いいじやアねえか……誠まにどうも旦那、極わりが悪わるいけれど、私わも貧し乏よ世じ帯えを張たつてやすから此の金はお貰もれえ申ましやしよう」

主人「それは誠に有あ難がい事ことで、就つきましたは貴方あなたのような御ご俠

客のお方と御懇意に致していただけますれば、此方の曲つた心も直ろうかと存じますので、押附けた事を願つて誠に恐入りますが、今日から親類になつて下さるようにならば、私は兄弟と云う者が無い身の上でございませぬゆえ、今年からお供の取遣りを致します、明日あたり餅搗きを致しますから、直にお供をお届け申しますが、何うぞ幾久しく御交際を願います」

長「冗談いっちゃアいけやせん、私のような貧乏人が親類になろうもんなら、番ごと借りにばかり往つて仕ようがねえ」

主人「イエ／＼何うか願います、それに又此の文七は親も兄弟もないもので、私どもへ奉公に参つた翌年に親父がなくなりまして、実に正道潔白な人間ですが、如何にも弱い方で店でも

出して遣りたいが、然しかるべき後見人が無ければ出して遣れんと思つておりましたが、貴方のようなお方が後見になつて下されば私は直すぐに暖簾のれんを分けて遣るつもりで、命の親という縁もございませから、親兄弟の無いものゆえ、此者これを貴方の子にして遣つて下さいまし、文七も願いな」

文「何うか貴方、然そうでもして下さいませんか、私わたくしは貴方に御恩返しごんがへしの仕方がございせん、不束ふつつかでございませが、私を貴方の子にして下されば、どんなにでも御恩返しに御孝行を尽します」
長「へエ、どうも旦那ア妙ですナ、へんてこですな」

主人「イエも何う致しまして、親子兄弟固めの献酬さかづきを致しまししょう…先刻さつきの酒を、その柄樽を文七」

文「へエお肴さかなが」

主人「イエサもう来ているだろう」

と云いながら腰障子を開けると、其の頃の事ゆえ、四ツ手駕籠
 で、刺青ほりものだらけの舁夫かごやが三枚で飛ばして参り、路地口へ駕籠を
 下おろし、あおりを揚げると中から出たのはお久で、昨日きのうに変わる今日きょう
 の出立いでたち、立派になつて駕籠の中より出ながら、

久「お父とつさん帰つて来たよ」

長「ムーンお久……どうして来た」

久「あの此処こゝにいらつしやる鼈甲屋の旦那様に請出うけだされて帰つ
 て来たよ」

兼「オヤお久、帰つたかえ」

と云いながら起つと、間が悪わりいからクルリと廻まわつて屏風の裡うちへ
隠かくれました。さて是から文七とお久を夫婦に致し、主人が暖簾を
分けて、麴こうじ町六丁目へ文七元結の店を開いたというお芽出度めでた
いお話でございます。

(拋酒井昇造速記)

青空文庫情報

底本：「定本 圓朝全集 卷の一」近代文芸・資料複製叢書、世界文庫

1963（昭和38）年6月10日発行

底本の親本：「圓朝全集卷の一」春陽堂

1926（大正15）年9月3日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返しの記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」は、それぞれ「其の」と「此の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※表題は底本では、「文七元結《ぶんしちもとゆい》」となっています。

入力：小林 繁雄

校正：かとうかおり

2000年5月8日公開

2016年4月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文七元結

三遊亭圓朝

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 鈴木行三校訂
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>